日本中國學會報　第七十集
二〇一八年十月六日　發行　抜刷

『荀爽九家集注』の注釋と卦象

藤田　衞一

『荀爽九家集注』の注釋と卦象

藤田　衞

はじめに

『荀爽九家集注』（以下、『九家易』）は、『經典釋文』序錄に據れば、荀爽・京房・馬融・鄭玄・宋衷・虞翻・陸績・姚信・翟子玄という漢から三國時代の易學者の集注であり、漢易とりわけ象數易を理解する上で、貴重な書物となっている。本書の際立った特徴の一つに、説卦傳に新たな卦象を付け加えていることがあり、それらの卦象は、『經典釋文』周易音義に列擧されている。後に朱熹の『周易本義』に取り入れられることになる。本書は、完本としては今に傳わっていないが、唐の李鼎祚『周易集解』に多く引かれており、その一端を窺い知ることができる。[1]

しかしながら、『九家易』の研究は少なく、それほど注目されてこなかった。[2] 論じられるにしても、張惠言は『周易荀氏九家』にて荀爽易注と『九家易』と合わせて荀爽の易學を論じ、徐芹庭は『九家易』によって荀爽易注を補完することができると述べるように、[3]『九家易』は荀爽易注の補助としての役割しか與えられてこなかった。

まず本稿で論じたいのは、『九家易』が、何晏『論語集解』のような注釋者を明示して引用する形での集注であったのか、それとも異なる形式を持っていたのか、である。張惠言は「九家は荀を述ぶる所以にして、他家を旁引して以て之を證成す（九家所以述荀、而旁引他家以證成之）」（『易義別錄』第三卷「周易翟氏」）と述べ、徐芹庭は『九家易』とそれに含まれるとされる九人の諸注とを比較し一致する部分を列擧するものの、どのような注釋形態を持っていたかまで踏み込んで論じていない。[4]『九家易』の注釋構造を明らかにすることによって、これまで荀爽ばかりに焦點を當てて論じられてきたことに對して再檢討を行う。

次に、『九家易』の説卦傳に新たに付け加えられた卦象が、何に基づくのか檢討したい。この『九家易』の卦象の來歴については、審らかとなっていない。馬國翰は、『九家易』の卦象は費直が傳えていた古文『易經』にあったもので、施・孟・梁丘の三家のいわゆる今文『易經』には脱逸していたのだと述べる。[5] しかし、この説には明證はなく、そのまま鵜呑みにはできない。再度、檢討する必要がある。

そこで本稿では、『九家易』と九人の易注との比較を通して、『九家易』の注釋の仕方を明らかにする。また、『九家易』の新たな卦象が九人

の易注の中で如何に使われているかを總覽し、その來源を探求する。[6]

一

まず、『九家易』の内容や成立時期を書錄を通して考察したい。

書錄における『九家易』の記載を見てみると、『隋書』經籍志には「周易荀爽九家易十卷」、『舊唐書』經籍志・『新唐書』藝文志には「十卷荀氏九家集解」、『經典釋文』序錄には「荀爽九家集注十卷」とある。書名はそれぞれ僅かに異なっているが、卷數は一貫して十卷である。ところが、これ以降の書錄には記錄されていない。[7] 唐までは完本として傳わっていたが、北宋の頃には散逸してしまっていたと考えられる。

現存する資料の中で、『九家易』に關する最も詳しい記述が、『經典釋文』序錄に存在する。

不知何人所集。稱荀爽者、以爲主故也。其序有荀爽・京房・馬融・鄭玄・宋衷・虞翻・陸績・姚信・翟子玄。子玄不詳何人、爲易義。注內文有張氏・朱氏、竝不詳何人。

何人の集むる所なるかを知らず。荀爽と稱するは、主と爲すを以ての故なり。其の序に荀爽・京房・馬融・鄭玄・宋衷・虞翻・陸績・姚信・翟子玄有り。子玄は何人なるかを詳らかにせず、易義を爲る。注內の文に張氏・朱氏有るも、竝びに何人なるかを詳らかにせず。

『九家易』の編纂者は不明とする。「荀爽九家集注」とされるのは、荀爽ら九人の集注であるためで、その內、荀爽が主とされることから「荀爽」が書名に冠せられているとする。また、その注內には張氏・朱氏の名が見えるとするが、この二人については不詳とする。[8]

『九家易』の編纂者は、『經典釋文』序錄で述べられている通り、審らかでない。これまで『九家易』の編纂者について、淮安九師の易說を荀爽が輯めたものとする說と六朝の人が撰したものだとする說がある。[9] 徐芹庭は、前者の說を否定した上で、『九家易』は東晉の人が編纂したものだとする。[10]

『九家易』に含まれているとされる九人の活躍した時期に注目すると、京房（前七七―前三七）は前漢の人、馬融（七九―一六六）・鄭玄（一二七―二〇〇）・荀爽（一二八―一九〇）・宋衷（生沒年不詳）は後漢の人、虞翻（生沒年不詳）・陸績（一八八―二一九）は後漢末から三國時代にかけての人、姚信（生沒年不詳）は三國の吳人、翟子玄は生沒年・人物ともに不詳とされる。

なお、翟子玄に關して、馬國翰は、翟玄のことだとする。そして、翟玄は、魏晉の閒の人だと推定している。[11] 翟玄の易注は、『周易集解』に多數引かれている。ここでは、馬國翰の說をとり、翟子玄を翟玄のことだとみなして論じていく。

また、『隋書』經籍志および『經典釋文』序錄での『九家易』が歷代の易注の中で列せられる位置に注目する。『隋書』經籍志での『九家易』の前後の易注を示すと、以下のようになる。

周易十卷。晉散騎常侍干寶注。
周易三卷。晉驃騎將軍王廙注、殘缺。梁有十卷。
周易八卷。晉著作郎張璠注、殘缺。梁有十卷。
周易馬鄭二王四家集解十卷。
周易荀爽九家注十卷。
周易楊氏集二王注五卷。梁有集馬鄭二王解十卷、亡。
周易十卷蜀才注。梁有齊安參軍費元珪注周易九卷、謝氏注周易八卷、尹濤注周易六卷、亡。

周易十卷。**後魏**司徒崔浩注。
『經典釋文』序錄では、以下のように位置づけられる。
干寶注十卷。字令升、新蔡人。**東晉**散騎常侍領著作。
黄穎注十卷。南海人。**晉**廣州儒林從事。
蜀才注十卷。七錄云、不詳何人。七志云、是王弼後人。……。
尹濤注六卷。不詳何人。
費元珪注九卷。蜀人。齊安西參軍。
荀爽九家集注十卷。……。
謝萬。字萬石、陳郡人。**東晉**豫州刺史。
韓伯。字康伯、潁川人。**東晉**太常卿。
袁悅之。字元禮、陳郡人。**東晉**驃騎諮議參軍。
桓玄。字敬道、譙國龍亢人。僞楚皇帝。
卞伯玉。濟陰人。**宋**東陽太守黄門郎。
荀柔之。潁川潁陰人。**宋**奉朝請。
徐爰。字季玉、琅邪人。**宋**大中大夫。
顧懽。字景怡、或云字玄。平吳郡人、**齊**太學博士、徵不起。
明僧紹。字承烈、平原人。國子傳士、徵不起。
劉瓛。字子珪、沛國人。**齊**步兵校尉。……。
自謝萬以下十人竝注繫辭、爲易音者三人。

以上のように、『九家易』は晉代の易注の中に列せられていることが分かる。『九家易』の前に置かれているのが干寶（?―三三六）や王廙（二七六―三二二）といった西晉から東晉にかけての人物であり、後に置かれているのが主に東晉以降の人物である。

『九家易』に含まれる易注が前漢から三國時代に限られていること、『九家易』が晉の易注の中に列せられることから勘案すれば、『九家易』は、晉代に編纂されたとするのが穏當であろう。

朱伯崑は、『九家易』は荀爽の後代の手になるものだとする。それは、『九家易』が荀爽を主とすることと、荀爽の子孫である荀顗・荀融・荀煇がみな易學に通曉していたことによる推論である。[12] だが、全くの見當違いとは言えないであろう。『九家易』が編纂されたと考えられる晉代は、荀氏一族が名族として數々の人士を輩出した時期である。[13] その時期にとりわけ荀爽を主とする『九家易』が編纂されたのは、無關係でないように思われる。『九家易』が、九人の易學の大家の内、荀爽を頂點とするのは、荀爽の易學を顯彰しようとした意圖があったのではないだろうか。[14] そのような『九家易』を晉代において作る動機を持つ者は、荀氏一族と關わりを持つ者とみるのが自然のように思われる。編纂者が荀氏一族とは限らないが、その周邊の人物が編纂したとみるのが説得的である。

要するに、『九家易』は、荀爽を中核とし、荀爽ら九人の集注であった。編纂者は不明であるが、西晉・東晉の間の人物、とりわけ荀氏一族に關わる人物の作だと考えられる。

二

『九家易』が荀爽・京房・馬融・鄭玄・宋衷・虞翻・陸績・姚信・翟子玄の九人の集注であったと確認したうえで、九人の易注がどのように取り入れられ注を形成していたのかの議論に移る。『九家易』とそれら九人の易注との比較を通して、『九家易』の注釋形態を檢討する。[15]

まず最初に、『九家易』の中核とされていた荀爽易注と較べる。同様な經文において『九家易』と荀爽易注との解釋が一致する部分を表

一に擧げる。傍線を附した部分がその一致する箇所である。

表一、『九家易』と荀爽易注

	『九家易』	荀爽易注
①	謂陽下動應之、則直而行、布陽氣動於四方也。[16]（『周易集解』卷二坤六二象傳注）	大者、陽也。二應五、五下動之、則應陽出直、布陽於四方。（『周易集解』卷二坤六二爻辭注）
②	實本坤體、未離其類、故稱血焉。血以**喻**陰也。元黃、天地之雜、言乾坤合居也。（『周易集解』卷二坤上六爻辭注）	實本坤卦、故曰未離其類也。血以**喻**陰順陽也。（『周易集解』卷二坤文言傳注）
③	陰陽合居、故曰兼。陽謂上六、坤行至亥、下有伏乾、陽者變化、以**喻**龍焉。（『周易集解』卷二坤文言傳注）	消息之位、坤在於亥。下有伏乾、爲其兼于陽、故稱龍也。（『周易集解』卷二坤上六爻辭注）
④	謂乾舍于離、同而爲日。天日同明、以照于下。君子則之、上下同心、故曰同人。（『周易集解』卷四同人象傳注）	乾舍于離、相與同居、故曰同人也。（『周易集解』卷四同人象傳注）
⑤	言三取初隔二、應上見乘、是无所容。无居自容、故貞吝。（『周易集解』卷七恆九三象傳注）	與初同象、欲據初隔二。與五爲兌、欲說之隔四。意无所定、故不恆其德。與上相應、欲往承之、爲陰所乘、故或承之羞也。貞吝者、謂正居其所、不與陰通也。无居自容、故貞吝矣。（『周易集解』卷七恆九三爻辭注）
⑥	幽谷、二也。此本否卦。謂陽來入坎、與初同體、故曰入幽谷。三者陽數。謂陽陷險中、爲陰所揜、終不得見。故曰三歲不覿也。（『周易集解』卷九困初六爻辭注）	爲陰所揜、故不明。（『周易集解』卷九困初六象傳注）
⑦	鼎言象者、卦也木火、互有乾兌、乾金兌澤。澤者、水也。爨以木火、是鼎鑊亨飪之象。…（『周易集解』卷一〇鼎彖傳注）	巽入離下、中有乾象。木火在外、金在其內、鼎鑊亨飪之象也。（『周易集解』卷一〇鼎彖傳注）

以上のように、『九家易』中に荀爽易注と近しい記述を見出せる。特に②の傍線部分は全く同じと言ってもよく、④⑦は荀爽易注よりやや詳細であり、⑤は荀爽易注の要點を纏めた形であることが注目される。『九家易』の注釋方法を考える上で、『九家易』に荀爽易注の影響があるものの、全く同じではないことは重要である。『九家易』が、九人の易注をそのまま抄錄したものではなかったことを示唆するからである。

同樣な經文の解釋という限定を拔きにすれば、この他にも『九家易』と荀爽の解釋法とが一致する箇所を多く見出すことができる。『九家易』には、荀爽に始まるとされる升降說を使った易解釋が散見される。升降說とは、陽爻・陰爻を升降によって移動させ解釋する方法論である。[17] 一例を擧げると、離☲☲六五象傳に對する『九家易』に「陽當に五に居るべく、陰退きて四に還る（陽當居五、陰退還四）」（『周易集解』卷六離六五象傳注）とある。これは離の九四を五爻に昇らせ、離の六五を四爻に降ろすことを言ったも

ので、まさに升降説を使った解釋である。實際、同じく離の九四爻辭に對する荀爽易注に「陽升りて五に居り、光炎宣揚す。故に𤇾如たるなり。陰退きて四に居り、灰炭降墜す、故に其れ來如たるなり（陽升居五、光炎宣揚、故𤇾如也。陰退居四、灰炭降墜、故其來如也）」（『周易集解』卷六離九四爻辭注）とあり、解釋方法が全く一緒であることが分かる。

また『九家易』には、荀爽易注と合致するものだけではなく、荀爽易注を解釋した記述が存在する。『周易集解』の姤彖傳「天地相遇、品物咸章也」の注に、

荀爽曰、謂乾成於巽、而舍於離。坤出於離、與乾相遇。南方夏位、萬物章明也。九家易曰、謂陽起子、運行至四月、六爻成乾、巽位在巳、故言乾成於巽。既成、轉舍於離、萬物皆盛大。坤從離出、與乾相遇、故言天地遇也。（『周易集解』卷九姤彖傳注）

荀爽曰く、乾は巽に成りて、離に舍る。坤は離より出で、乾と相ひ遇ふを謂ふ。南方は夏位、萬物章明するなり、と。九家易に曰く、陽は子より起り、運行して四月に至り、六爻乾と成り、巽位は巳に在るを謂ふ、故に乾は巽に成ると言ふ。既成は、轉じて離に舍り、萬物皆な盛大す。坤 離より出で、乾と相ひ遇ふ、故に天地遇ふと言ふなり、と。

とある。注目すべきは、『九家易』の「故言乾成於巽」である。これは明らかに前に引く荀爽易注の「乾成於巽」を指している。『九家易』の「陽は子より起り、運行して四月に至り、六爻 乾と成り、巽位は巳に在るを謂ふ」は、陽は十一月子から起こり、四月までの六ヶ月運行すれば乾☰☰が完成し、そして四月は巳であり、八卦方位では巽の方位に當たることを述べたものである。これは、「乾は巽に成る」を解釋した言説であることは明らかである。つまり、「謂陽起子、運行至四月、六爻成乾、巽位在巳」は、「乾成於巽」のパラフレイズであり、荀爽易注の解釋でもあった。この『九家易』は、荀爽易注を基礎に据え、それを『九家易』の編纂者が解釋を加える構造を持っているものと考えられる。

『九家易』での荀爽の影響は、九人の内、最も多く見出せる。『經典釋文』序錄で「荀爽と稱するは、主と爲すを以ての故なり」とされていたが、このことから、それが疑いようのない事實であることが確かめられる。

次に『九家易』と鄭玄易注とが合致する例を表二に擧げる。

表二、『九家易』と鄭玄易注

	『九家易』	鄭玄易注
①	鼎言象者、卦也木火、互有乾兌、乾金兌澤。澤者、水也。爨以木火、是鼎鑊享飪之象。…（『周易集解』卷一〇鼎彖傳注）	鼎、象也。卦有木火之用、互體乾兌。乾爲金、兌爲澤、澤鐘金而含水、爨以木火、鼎烹熟物之象。…（『周易集解』卷一〇鼎卦辭注）
②	古者无文字、其有約誓之事、事大大其繩、事小小其繩、結之多少、隨物衆寡、各執以相考、亦足以相治也。…（『周易集解』卷一五繫辭傳下注）	爲約、事大大其繩、事小小其繩。（『尚書正義』尚書序疏引繫辭傳鄭玄注）

『九家易』と鄭玄易注とが一致するものは、二箇所見出せる。しかし、ただ部分的に一致するに過ぎない。

ところで、この表二①の『九家易』は、荀爽易注とも一致する箇所があったところであった（表一⑦）。今一度、ここでそれぞれを比較して見たい。

〔九家易〕

鼎言象者、卦也木火、互有乾兌、乾金兌澤。澤者、水也。爨以木火、是鼎鑊亨飪之象。

〔荀爽注〕

巽入離下、中有乾象。木火在外、金在其内、鼎鑊亨飪之象也。

〔鄭玄注〕

鼎、象也。卦有木火之用、互體乾兌。乾爲金、兌爲澤、澤鐘金而含水、爨以木火、鼎烹熟物之象。

『九家易』の傍線部分は鄭玄注に近く、二重線部分は荀爽易注に近いことが分かる。八卦の五行配當に據れば、鼎䷱の内卦の離は火を表し、外卦の震は木を表す。さらに鼎の二・三・四爻の互體を求めると乾が得られ、乾は金を表す。これに基づき、荀爽は「鼎鑊もて亨飪するの象」を得ている。それに對し、鄭玄は、巽から木、離から火を導き出すことは同じであるが、さらに鼎から互體を求めて解釋する。鼎の二・三・四爻から乾を得、乾は金を表し、鼎の三・四・五爻から兌を得、兌は澤を表す。そのことから、鼎に水が滿たされている象徵を見出し、前に導き出した木と火を加えて、「鼎もて熟物を烹するの象」を導き出すのである。荀爽と鄭玄の解釋はやや異なるとはいえ、卦の五行配當そして互體を使って鼎で物を煮る象を導き出す點は一致し、注釋の方向性は同じであると言える。おそらく荀爽易注を主としながらも、荀爽よりやや詳しい鄭玄注を採用したことにより、荀爽易注と鄭玄易注の統合という形になったと考えられる。

『九家易』と虞翻易注との一致例を表三に擧げる。

表三、『九家易』と虞翻易注

	『九家易』	虞翻易注
①	四互體離、離爲目也。離既不正、五引而上、三引而下、故反目也。輿以輪成車、夫以妻成室。今以妻乘夫、其道逆、故不能正室。（『周易集解』卷三小畜九三爻辭注）	豫震爲夫、爲反。巽爲妻。離爲目。今夫妻共在四、離火動上、目象不正、巽多白眼、夫妻反目。妻當在内、夫當在外、今妻乘夫而出在外、象曰不能正室。三體離需、飲食之道。飲食有訟、故爭而反目也。（『周易集解』卷三小畜九三象傳注）

虞翻易注と解釋が近いものとしては、一例だけしか見出せない。ただ、『九家易』に虞翻特有の易解釋法を用いた記述を見出せる

乾當來上、不可用師而拒之也。自邑者、謂從坤性而降也。告命者、謂下爲巽、宣布君之命令也。三陰自相告語、俱下服順承乾也。城復于隍、國政崩也。坤爲亂、否巽爲命、交在泰上、故其命亂也。（『周易集解』卷四泰上六象傳注）

乾當に來りて上るべく、師を用ひて之を拒むべからざるなり。自邑とは、坤性に從ひて降るを謂ふなり。告命とは、下りて巽たり、君の命令を宣布するを謂ふなり。三陰自ら相ひ告語し、俱に下りて服順して乾を承くるなり。城は隍に復し、國政崩るるなり。坤は亂と爲し、否巽は命と爲し、交りて泰上に在り、故に其の命亂るるなり。

これは、泰上六象傳に對する『九家易』である。この文中の「否巽

爲命」が、虞翻由來と推せる文句である。これは、旁通説による解釋である。旁通説とは、一卦六爻の陰陽すべてを逆轉させて別の卦を生み出し解釋する虞翻特有の易解釋法である[18]。虞翻は、旁通で得た卦の象で解釋するとき、旁通で得た卦、その卦から取る八卦、その八卦から得る象の順で記述する。小畜六三の虞翻易注にある「豫坤爲車、爲輹」（『周易集解』卷三小畜九三注）を例に取ろう。小畜䷈は、虞翻が「豫と旁通す（與豫旁通）」（『周易集解』卷三小畜彖傳注）とするように、小畜の爻の陰陽を反轉させた豫䷏と旁通する。そして、豫の內卦は坤☷であり、坤は、說卦傳に「爲大輿」とあるから、「車」の象を持っていることになる。それゆえ「豫坤爲車、爲輹」となるのである。

「否巽爲命」に戻ると、泰䷊は六爻の陰陽を反轉させた否䷋と旁通する。否の三・四・五爻の互體を取ると巽☴が導き出され、說卦傳には見えないが、虞翻が「巽爲命」（『周易集解』卷四大有象傳注）とするように、巽には「命」の象があるとされる。それゆえ「否巽爲命」となるのである。この解釋法は虞翻にしか見られず、この『九家易』の文句は、虞翻易注から取ったことは疑いない。實際、泰の上六爻辭に對する虞翻易注に「否巽爲命」（『周易集解』卷四泰上六爻辭注）とある。『九家易』と馬融易注との一致する部分を見ていく。それが、表四である。

表四、『九家易』と馬融易注

	『九家易』	『馬融易注』
①	…柝[19]者、兩木相擊以行夜也。…（『周易集解』卷一五繫辭傳下注）	兩木相擊以行夜也。（『經典釋文』卷二引）

「柝」に對する解釋に『九家易』と馬融易注と一致するものが見出せる。馬融易注の佚文自體それほど殘っていないこともあるが、この一例しか明確に一致するものは探し出せない。

殘りの京房・宋衷・陸績・姚信・翟子玄の易注との一致例については、これらの佚文がそれほど多くないこともあるが、明確に繼承關係があるものを指摘することはできない。『九家易』には、京氏易で特徵的な十二消息法や八宮世應圖を用いた解釋が見られる。しかし、荀爽を始めとする後漢の易學者も、京氏易の技法を受け繼ぎ解釋することがあることから、京房の易注由來であるとは卽斷できない。ただ以上で見てきたように荀爽・鄭玄・虞翻・馬融の易注が『九家易』に含まれていることから考えると、京房・宋衷・陸績・姚信・翟子玄の易注も、『九家易』に何かしら取り入れられていたと見て閒違いないであろう。

また、『九家易』には荀爽易注にさらなる解釋を加える注が存在することを指摘したが、屯の六二象傳「十年乃字、反常也」に對する『九家易』にも、その現象が見て取れる。

陰出於坤、今還爲坤、故曰反常也。陰出於坤、謂乾再索而得坎。今變成震、中有坤體、故言陰出於坤、今還於坤。（『周易集解』卷二屯六二象傳注）

陰は坤より出で、今還りて坤と爲る、故に曰く常に反る、と。陰は坤より出づとは、乾再び索（もと）めて坎を得、今變じて震と成り、中に坤體有るを謂ふ、故に陰は坤より出で、今坤に還ると言ふ。

これは、「陰出於坤、今還爲坤、故曰反常也」の注に對し、以下その注に解釋を加えるという構造を持っている。おそらく「陰出於坤、今還爲坤、故曰反常也」は九人の內の誰かの注であり、それを編纂者が解釋したものであろう。

『九家易』とそれに含まれているとされる九人の易注とを比較すると、荀爽・馬融・鄭玄・虞翻の易注で一致する文句を發見することができた。また、二人以上の易注を統合した例や、他の易注を提示し、さらに編纂者が解釋する注も存在することが明らかとなった。そのような中で、『經典釋文』序錄で指摘するように、荀爽の影響が最も多く看取された。『九家易』は、荀爽易注を基礎に据え、それに足りない部分を殘りの八人の易注で補う形で編纂されたのではないだろうか。ただ、今回の考察で明らかになったことは、『九家易』が『論語集解』のような注釋者を明示して引用する形では注釋されていなかったことである。要するに、『九家易』は、荀爽易注を中核として、編者の見解を交えながら九人の易注を統合し、一つの注に再構築したものであったのである。

これまで『九家易』は、荀爽易注と同一視されて論じられてきた嫌いがあった。しかし『九家易』は、荀爽ら九人の易注が織り交ぜられて一つの注が形成されているのであり、純然たる荀爽易注ではないのである。『九家易』と荀爽易注とが互いに補完し得る箇所も確かに存在するのであるが、必要以上に相關させてしまうと荀爽の易學を見誤ってしまうであろう。愼重な文獻批判が求められる。

三

『九家易』の特異な特徵に、說卦傳に新たな卦象を付け加えることがあった。『經典釋文』に『九家易』の三十一の新たな卦象が記錄されている。

荀爽九家集解本、乾後更有四、爲龍、爲直、爲衣、爲言。巛後有八、爲牝、爲迷、爲方、爲囊、爲裳、爲黃、爲帛、爲漿。震後有三、爲王、爲鵠、爲鼓。巽後有二、爲楊、爲鸛。坎後有八、爲宮、爲律、爲可、爲棟、爲叢棘、爲狐、爲蒺藜、爲桎梏。離後有一、爲牝牛。艮後有三、爲鼻、爲虎、爲狐。兌後有二、爲常、爲輔頰。（『經典釋文』卷二）

荀爽九家集解本、乾後に更に四有り、龍と爲し、直と爲し、衣と爲し、言と爲す。巛後に八有り、牝と爲し、迷と爲し、方と爲し、囊と爲し、裳と爲し、黃と爲し、帛と爲し、漿と爲す。震後に三有り、王と爲し、鵠と爲し、鼓と爲す。巽後に二有り、楊と爲し、鸛と爲す。坎後に八有り、宮と爲し、律と爲し、可と爲し、棟と爲し、叢棘と爲し、狐と爲し、蒺藜と爲し、桎梏と爲す。離後に一有り、牝牛と爲す。艮後に三有り、鼻と爲し、虎と爲し、狐と爲す。兌後に二有り、常と爲し、輔頰と爲す。

では、これらの卦象は何に基づくのか。最後に、『九家易』の卦象の起源について探求したい。

まず考えられるのが、九人の內の誰かに基づくということである。そこで、『九家易』の卦象が九人の易注の中で、どの程度使われているかを見てみる。それが表五である。[20]

表五から、虞翻易注で多く使われており、その他の易注では全く使われていないことが分かる。ただ虞翻が卦象を多用することや、殘された佚文の偏りも考慮に入れなければならないだろう。

では、『九家易』の卦象が虞翻に基づくのかといえば、そうとは言えない。それは、『九家易』の卦象と異なる例があるからである。虞翻と『九家易』の卦象と異なる例を擧げる。

乾爲王（『周易集解』卷二坤六三爻辭注）

坤爲虎（『周易集解』卷一乾文言傳注）

表五、九人の易注における『九家易』の卦象の使われる回數

震象			坤象								乾象				『九家易』
鼓	鵠	王	漿	帛	黄	裳	囊	方	迷	牝	言	衣	直	龍	卦象
															荀爽
															京房
															馬融
															鄭玄
															宋衷
1						1	1	5	2	2	1	4		1	虞翻
															陸績
															姚信
															翟子玄

兌象		艮象			離象	坎象								巽象		『九家易』
輔頰	常	狐	虎	鼻	牝牛	桎梏	蒺藜	狐	叢棘	棟	可	律	宮	鸛	楊	卦象
																荀爽
																京房
																馬融
																鄭玄
																宋衷
		4		7			1		1	1			2		1	虞翻
																陸績
																姚信
																翟子玄

坤爲牝牛（『周易集解』卷四離卦辭注）
震爲言（『周易集解』卷二坤六三爻辭注）
震爲常（『周易集解』卷二坤文言傳注）
離爲黄（『周易集解』卷六鼎六五爻辭注）
巽爲帛（『周易集解』卷四賁六五爻辭注）

以上のように、虞翻は『九家易』の卦象とは異なる結びつけ方をする。また虞翻は、「俗説は皆な離を以て牝牛と爲す、之を失す（俗説皆以離爲牝牛、失之）」（『周易集解』卷四離卦辭注）と述べ、「牝牛」を離象となすことを批判する。この「牝牛」を離象となすことは、『九家易』の卦象と一致する。このことからも、『九家易』の卦象のすべてが、虞翻由來ではないことは明らかである。

では、虞翻でなければ、何に基づいているのかと言えば、殘念ながら現存する資料ではそれを突き止めることはできない。馬國翰は、八卦の逸象は、費氏古文にあったものとし、また惠棟は、虞翻は孟喜の學を代々受け繼ぎ、『九家易』の十倍の數の卦象を生み出したとする。[21] しかしながら、ともに推測であり、明證はない。卦象をもって解釋することは、『春秋左氏傳』『國語』に記載されている占斷、孟喜の易注に見えている。[22] 説卦傳にはない卦象をもって解釋する行爲は、『國語』に「震は、車なり（震、車也）」（『國語』晉語四）、「子夏傳に曰く、坎は小狐と稱す、と。孟喜曰く、坎は、穴なり。狐は穴居す、と（子夏傳曰、坎稱小狐。孟喜曰、坎、穴也。狐穴居）」（『漢上易傳』卷九引）とあり、[23] 古くは戰國時代には行われていたことになる。しかし、戰國時代に説卦傳が成立していたかという問題がある。少なくとも説卦傳にはない卦象を生み出す行爲は前漢には行われていた可能性がある。

説卦傳にはない新たな卦象を生み出す營爲は、前漢においてすでに

行われていた可能性があるが、後漢になって多用されるようになることは事實である。虞翻が「馬君及び俗儒皆な乾を以て車と爲す（馬君及俗儒皆以乾爲車）」（『周易集解』卷三豫九三爻辭注）と述べるように、馬融は說卦傳にはない卦象を生み出し解釋を行っていた。[24] また、荀爽も說卦傳にはない卦象を持ち出し解釋し、宋衷・陸績にもまたその傾向がある。[25] そして、虞翻においてその數は頂點を極めた。[26]

では、なぜ後漢において、說卦傳にはない新たな卦象を生み出す解釋法が流行したのか。このことを考察することによって、『九家易』の卦象の發生源を絞り込めるはずである。

筆者は、『九家易』の卦象は費氏學が取り入れられた後漢の易學において形成されたとみる。費氏學は、費直を祖とする學問である。費直は、字は長翁、東萊の人で、前漢末頃の人物である。費直の易學の特徵は、

長於卦筮、亡章句、徒以彖象系辭十篇文言解說上下經。（『漢書』儒林傳）

卦筮に長じ、章句亡く、徒だ彖象系辭十篇の文言を以て上下經を解說す。

とあるように、十翼をもって『周易』上下經を解說することにあった。加賀榮治氏の言を借りれば、「據傳解經法」が費氏學の一つの特徵であった。[27] 費氏學が隆盛するのは、後漢に入ってからである。

陳元・鄭衆皆傳費氏易、其後馬融亦爲其傳。融授鄭玄、玄作易注、荀爽又作易傳、自是費氏興、而京氏遂衰。（『後漢書』儒林列傳上）

陳元・鄭衆皆な費氏易を傳へ、其の後 馬融も亦た其の傳を爲る。融 鄭玄に授け、玄易注を作り、荀爽又た易傳を作り、是れより費氏興りて、京氏遂に衰ふ。

費氏易は陳元・鄭衆によって傳えられ、馬融が費氏學を取り入れ易傳を作る。また、馬融は鄭玄に授け、鄭玄も費氏學を取り入れて易注を作り、荀爽もまた同樣に易注を作ったという。そのことによって、京氏學が衰えるほど費氏學が流行したという。

この費氏學の「據傳解經法」が、後漢において說卦傳にはない卦象を盛んに生み出されるようになったきっかけとなったと考えられる。漢代の易學は、卦象と數理をもって解釋する、所謂、象數易を特徵とする。本田濟氏が「鄭・荀・虞それぞれ特徵はあるが、共通する點は、卦辭爻辭の一字一字を、その卦の形の中に結びつけようとすること」[28] と述べられるように、特に後漢の易學では、如何に卦の陰陽構造と卦辭・爻辭の一字一句とを有機的に結びつけるかが一つの大きなテーマであったように思われる。それは、費氏學の「據傳解經法」がその方向性に大きな影響を與えたのではないだろうか。彖傳・象傳には、卦の陰陽構造をもって卦辭・爻辭を說明することがある。[29] それを敷衍すれば、當然すべての卦辭・爻辭が卦の陰陽構造によって說明可能となる。後漢の易學者は、それを實現するために樣々な易解釋の技法を編み出してきたと考えられる。荀爽の升降說・鄭玄の爻辰說・虞翻の旁通說などは、占候のためというより、訓詁のための技法である。前漢に生み出された孟喜に始まる卦氣說や京房の種々の學說が、專ら占候のための技法であったことと好對照をなす。[30] 後漢の易學者は、卦辭・爻辭の一字一句を卦の陰陽構造とに結びつけようと腐心してきたわけである。そのとき、十翼の一つである說卦傳も大きな役割を果たした。卦辭・爻辭にある文句を說卦傳の卦象を通して卦の陰陽構造と結びつけたのである。しかしながら、說卦傳にある卦象だけではすべてを覆うには不十分である。そこで多用されたのが、新たな卦象を生み出す

營爲であったと考えられる。このことによって、卦辭・爻辭を卦の陰陽構造に相關させることをより容易にしたわけである。

馬融が說卦傳にはない新たな卦象をもって解釋していたことはすでに指摘した。馬融は、費氏易を取り入れ易注を作った最初の人物である[31]。費氏學の「據傳解經法」を取り入れ、十翼を用いて卦辭・爻辭を解釋しようとする試みの中で、新たな卦象を生み出すに至ったのではないだろうか。荀爽・虞翻らが新たな卦象を生み出したのも、卦の陰陽構造と卦辭・爻辭とを徹底的に結びつけようとした試みに他ならない。說卦傳の卦象が必ずしも卦辭・爻辭にある字ではないのに對し、『九家易』の卦象のほとんどが卦辭・爻辭にある字であることは注目に値する[32]。それは、『九家易』の卦象が卦辭・爻辭の解釋のために編み出された卦象であったことを示すものである[33]。

說卦傳にはない新たな卦象を生み出す營爲は、後漢になって盛んに行われるようになる。それは、後漢において費氏學の「據傳解經法」が取り入れられたことと深く關わっていた。費氏學の「據傳解經法」という技法が、卦の陰陽構造と卦辭・爻辭を有機的に結びつけようとする意識を惹起させ、その一つの技法として說卦傳にはない新たな卦象を生み出すという結果に結實したのである。そして野放圖とも言える新たな卦象の案出が、王弼の「忘象論」といった反發に繫がっていくのである[34]。

『九家易』の三十一の卦象の具體的な基づくところは明らかにできない。ただ、『九家易』が九人の易注を統合したものであったと考えたとき、この『九家易』の卦象もまた統合されたものであった可能性も考えなければならないだろう。しかし、そうであったとしても、『九家易』の編纂者がどのような基準をもってこの三十一の卦象を選定したのか疑問は殘る。少なくとも『九家易』の卦象は、費氏學が取り入れられた後漢に形成されたものと考えられる。

おわりに

本稿では、『九家易』を取り上げ、『九家易』とそれに含まれるとされる九人の易注との比較を通して、その注釋構造を明らかにしようと試みた。また、『九家易』の特異な點である說卦傳に新たに加えられた卦象が九人の易注の中で如何に使われているかを總覽し、その來源を考察した。

『九家易』とそれに含まれるとされる九人の易注と比較した結果、荀爽・馬融・鄭玄・虞翻の易注で一致する文句を見出すことができ、さらには二人以上の易注を統合した注や編纂者が他の易注をさらに解釋した例もあった。そのことから、『九家易』は、荀爽易注を中核として、編者の見解を交えながら九人の易注を統合し、一つの注に再構築したものであったと結論づけられた。

また、『九家易』の新たな卦象の歷源を考察するに當たって、九人の易注で使われる回數を計算した。その結果、虞翻の易注で多く使われていたことが判明した。しかしながら、虞翻の易注には『九家易』の卦象と相反することもあり、すべてが虞翻に基づくものではないと考えられた。『九家易』の卦象のよるところまでは明らかにできなったが、その起こるところは費氏易が流行した後漢にあると指摘した。費氏學は、「據傳解經法」という十翼をもって卦辭・爻辭を解釋するという特徵を持っていた。それが、後漢の易學者に取り入れられ、卦辭・爻辭の一字一句と卦の陰陽構造とを有機的に結びつけようとする試みのきっかけとなり、その一つの手段として說卦傳にはない新たな

卦象を生み出すという結果になったと考えられた。『九家易』の卦象は、その過程の中で案出されたものであったと思われる。

これまで荀爽の影響ばかりに注目され論じられてきた『九家易』だが、今回の考察によって、そればかりでは捉えることができないことが明らかとなった。『九家易』の最大の特徴は、荀爽を中核としながらも、九人の注を統合し新たな注に再構成したことにあった。そして、『九家易』に含まれる九人は、漢から三國にかけての象數易を代表する易學者たちである。その點で、『九家易』は、當時における象數易學の集大成であったとみることができるであろう。

注

（1）『九家易』の輯本としては、明・王謨『九家易解』（『漢魏遺書鈔』）、清・孫堂『九家集解集注』（『漢魏二十一家易注』）、清・黄奭『九家易集注』（『漢學堂經解』）、「五、《周易荀爽九家集注》闡微」（『漢易闡微下』、中國書店、二〇一〇）がある。

（2）『九家易』を論じている研究には、小澤文四郎『漢代易學の研究』（明德出版社、一九七〇）第三章第三節「荀爽の易說附荀爽九家義」、注（1）所掲『漢易闡微下』第十五「《荀爽九家易》」、王棋「荀爽與《九家易》」（『周易研究』二〇一二年第五期、二〇一二）がある。

（3）注（1）所掲『漢易闡微下』五三六項。

（4）注（1）所掲『漢易闡微下』第十五章三「《荀爽九家集注》之淵源」。

（5）『玉函山房輯佚書』「周易荀氏注」序「八卦逸象、費氏古文有之、三家脫佚耳」。

（6）本稿で用いる『九家易』のテキストは、『學津討原』本『周易集解』、『四部叢刊』本『經典釋文』から直接引いたものを使用した。また必要に應じて、李道平『周易集解纂疏』（中華書局、一九九四）を參照した。

（7）唯一、『通志』藝文志に「集注周易十卷。荀爽九家」とあるが、『通志』藝文志は佚存を問わず記載するので、實態を伴っていない。

（8）「張氏・朱氏」について、朱彝尊は、張倫・朱仰之のことだとする（『經義考』卷一〇）。

（9）荀爽が淮安九師の易說を輯めたものとする說は、陳振孫（『直齋書錄解題』卷一「周易集解十卷」）に始まる。王謨『九家易解』では、その說に基づき「淮南九師堂訓」を附している。六朝の人が撰したものだとする者には、惠棟（『易漢學』卷七）・張惠言（『周易荀氏九家義』）・徐芹庭（注（1）所掲『漢易闡微下』第十五章二「《荀爽九家易》作者之異說」）、王棋（注（2）所掲「荀爽與《九家易》」）がいる。

（10）注（1）所掲『漢易闡微下』第十五章二「《荀爽九家易》作者之異說」。また、王棋（注（2）所掲「荀爽與《九家易》」）でも、前者の說が明確に否定されている。

（11）『玉函山房輯佚書』「周易翟氏易」「按古人多有名與字同者、如韓伯字康伯之類、或玄字子玄與。九家次第翟在姚信之後、則玄蓋亦魏晉閒人也」。

（12）朱伯崑『易學哲學史』上册（北京大學出版社、一九八六）二八七頁。

（13）魏晉における荀氏一族の事跡については、丹羽兌子「魏晉時代の名族―荀氏の人々について―」（『中國中世史研究』、東洋大學出版社、一九七〇）が詳しい。

（14）王棋は、『九家易』の成立は魏晉象數易學と義理易學の鬪爭の結果だとし、象數易學の衰微する中で、象數易學の義理易學に對する反抗という側面があったとみている。注（2）所掲「荀爽與《九家易》」參照。

（15）『九家易』と九人の易注との一致する箇所を指摘しているものには、注（1）所掲『漢易闡微下』第十五章三「《荀爽九家集注》之淵源」がある。注（2）所掲「荀爽與《九家易》」では、『九家易』と荀爽易注と

で一致する内容を持つ箇所を擧げている。

(16) 底本は「布陽氣於四方也」に作るが、朱氏刻本『周易集解』(『北京圖書館古籍珍本叢刊』第一册所收)では「氣」の下に「動」の字がある。今、これを補う。

(17) 升降說については、鈴木由次郎『漢易研究』第二部第二章第八節「升降說」、朱伯崑『易學哲學史 上册』(北京大學出版社、一九八六)第二編第三章第二節二「荀爽的乾升坤降說」、秦潔「荀爽"升降"易例覆議」(『周易研究』(二〇一七年第一期、二〇一七)参照。

(18) 旁通說については、注(17)所掲『漢易研究』第二部第二章第九節「旁通」参照。

(19) 底本は「棟」に作るが、朱氏刻本によって「桥」に改める。

(20) 表を作るに當たって、「乾爲龍」のように、八卦、「爲」、『九家易』の卦象の順で記述されているもののみで統計した。

(21) 惠棟『易漢學』卷三「虞仲翔傳其家五世孟氏之學、八卦取象、十倍于九家」。

(22) 例えば、『春秋左氏傳』莊公二十二年「坤、土也。巽、風也。乾、天也」、『國語』晉語四「震、車也。坎、水也。坤、土也」、『易言莧陸。孟喜云、獸名。夬有兌。兌爲羊也」(『路史』卷一四後記五注引)。屈萬里は、象數をもって『易』を解釋するのは、孟喜に始まるとする(「先秦漢魏易例述例(漢魏部分)」、一九五九、『幼獅學報』第一卷・第二册)。しかし遡れば、『春秋左氏傳』『國語』にも卦象を利用した占斷例が見える。

(23) 『子夏易傳』の著者について諸說あり、孔子の弟子の子夏とする說、前漢の韓嬰とする說、韓嬰の孫の韓商とする說がある(伊東倫厚「『子夏易傳』名義考」、『中國哲學』第一〇號、一九八一)。なお、今本『子夏易傳』は僞作とされる(張心澂『僞書通考』、商務印書館、一九三九)。

(24) この他にも、馬融は「兌爲虎」(『漢上易傳』卷三)といった新たな卦象を生み出している。虞翻は「俗儒皆以兌爲虎、乾履兌、非也」(『周易集解』卷三履卦辭注)とそれを批判しており、この「俗儒」の中に馬融も含まれるのだろう。

(25) 方申『方氏易學五書』(『續修四庫全書』第三〇册所收)参照。なお、鄭玄もまた費氏學の影響を受けており、說卦傳の卦象をもって解釋することを多用する。しかし、說卦傳にはない卦象をもって解釋することはほとんどなく、あっても說卦傳の卦象から敷衍させたものと推せるものばかりである。その點で、鄭玄は、經文に忠實であったと言える。

(26) 虞翻の逸象を輯集したものには、惠棟『易漢學』、張惠言『周易虞氏義』があり、注(17)所掲『漢易研究』一四三―一四六項では該當箇所が採錄されている。

(27) 加賀榮治『中國古典解釋史 魏晉篇』(勁草書房、一九六四)第三章第一節一「いわゆる「費氏易」の法と、王弼の「周易注」における意味」参照。

(28) 本田濟『易』(朝日新聞出版、一九九七)一五項。

(29) 例えば、蒙䷃の彖傳に「蒙、山下有險、險而止、蒙」とあるのは、蒙の內卦が坎☵、外卦が艮☶であり、艮が「山」と「止」、坎が「陷」を表すとする說卦傳に基づいた言說である。また、屯䷂六二の象傳「六二之難、乘剛也」の「乘剛」は、屯の六二が初九の上に乘っていることを述べたものである。

(30) もちろん孟・京の易學だけが前漢の易學ではない。梁氏易・施氏易・高氏易といった易學も存在したが、西晉に亡んでしまい、どのような易學だったのか審らかでない。ただ、それら易學の源流に當たる丁寬が「作易說三萬言、訓故擧大誼而已」(『漢書』儒林傳)とされるように、字義の大まかな把握に止まっていたと思われる。清の皮錫瑞は、漢初の易學は義理を說くと述べる(『經學通論』易經「十、論漢初易皆主義理、切人事、不言陰陽術數」)。前漢の易學を總じて言えば、卦辭・爻辭の一字一句を

に忠實な解釋、傳への回歸を目指したことにあったと考えている。この問題については、また稿を改めて論ずることにしたい。

卦の陰陽構造に相關させようとすることは希薄であった。蕭漢明 白井順（譯）「漢代易學の基本的な特徴について」（渡邉義浩『兩漢における易と三禮』（汲古書院、二〇〇六）所收）では、漢代易學の特徴について簡明に纏められている。

(31) 張惠言は、馬融の易學について、「今馬傳既亡、所見僅訓詁碎義、就其一隅而返之、大抵以乾坤十二爻論消息、以人事政治議卦爻。此鄭所本于馬也。馬于象疎、鄭合之以爻辰、馬于人事雜、鄭約之以周禮。此鄭所以精于馬也」（『易義別錄』第九卷「周易馬氏」）と評している。潘斌は、馬融の易學は象數と義理を兼ねるとしている（「馬融易學探微」、『周易研究』二〇一〇年第四期、二〇一〇）。

(32) 唯一、「漿」「鵠」「鸛」のみが卦辭・爻辭にない字である。「鵠」「鸛」は、漸の爻辭にある「鴻」、中孚の九二の爻辭にある「鶴」と同定しうる可能性がある（項安世『周易玩辭』卷一五）。しかし、「漿」だけは、なぜこの卦象が生み出されたのか不明である。項安世は「酒主陽、漿主陰、故坤爲漿」（『周易玩辭』卷一五）と述べ、「酒」との關連を指摘している。

(33) 『九家易』の卦象の由來を論じているものには、朱震『漢上易傳』、項安世『周易玩辭』、紀磊『九家逸象辨證』（『續修四庫全書』第三五册所收）があり、多くは卦辭・爻辭の文句にその根據を求めている。

(34) 王弼もまた「據傳解經法」をもって解釋することを旨としていた。王弼は、漢代の象數易的解釋を排し、傳に據りつつ經文の意義を說き明かす方向で解釋する。所謂、義理易である。ただ王弼は全く卦象を排したわけではない。傳以上に卦象をもって解釋しないだけである。王弼が排したのは、傳に典據のない技法をもって解釋することであり、傳からの逸脫であったと思われる。かくも「據傳解經法」から後漢の象數易、王弼の義理易といった異なった潮流が生じ得たのは、後漢の易學は前漢の易學を受け繼ぎつつ傳を敷衍する形で發展し、王弼はそれに反發し、傳